

論文審査の要旨及び担当者

論文題名

日本中世絵画における女性の信仰と表象に関する研究

論文審査の要旨

本論文は、天明・寛政期（1781～1801）における、高度に知的な絵画文芸黄表紙の表象に焦点を当てて、論じたものである。

第1章『心学早染草』論は、寛政2年（1790）に刊行された『心学早染草』（山東京伝作・北尾政美画）を主たる対象として検討を加え、当時の戯作のありようを析出したもので、本論文の中核をなす。

第1節「作品世界の魅力」では、主人公の善悪の心を擬人化したキャラクターで、丸い顔に「善」「悪」の文字を配した上半身裸の禪姿というユーモラスな姿で描かれる善玉悪玉の特徴を「おかしみ、教訓、擬人化」という三つの視点から、明らかにする。「おかしみ」は、善玉悪玉の動きが滑稽で、歌舞伎の舞踊や浮世絵で笑いを誘う要素になっているところに見て取れるとする。「教訓」は、心学に関わる浮世絵や教訓書、双六の例に顕著であると指摘する。「擬人化」は、顔に善悪の文字以外を入れることで、さまざまな事物や抽象物を人に擬えるところがそれに当たるという。この三分類はきわめて的確で、善玉悪玉の性質が非常に鮮明になったと言えよう。

第2節「善玉悪玉の図像の成立」では、善玉悪玉の先蹤を探るため、『心学早染草』刊行以前の草双紙から魂の図像の変遷過程を丁寧にたどっていく。その具体的な様相は以下の通り。黒本青本や初期の黄表紙挿絵でも、人の死後の靈魂を炎のような形で表しており、さらに炎の中には、「心」の字や丸に「心」の字を書き入れた例も見られるが、文字の有無や図像の形は統一されていない。類似した図像には、神仏の化身やその魂を表した例も見られ、『間違曲輪遊』（恋川春町作画、安永7年<1778>刊）では、丸に「心」の字で大黒、恵比寿の化身として描かれている。丸に「心」の字を入れた図像は、『天地人三階図絵』（山

東京伝作画、天明5年<1785>刊)や滑稽本『羽勘三台図絵』(朋誠堂喜三二作、寛政3年刊)の例から、歌舞伎の舞台上の演出の影響が考えられる。京伝作品の例では、安永9年から天明7年までの作品で、人の念を炎の図像で表す例が見られる。「心」の字を入れた図像には、『時代世話二挺鼓』(喜多川行磨画、天明8年刊)がある。さらに『心学早染草』の前年に刊行された『延寿反魂談』(北尾政演<京伝>画、寛政元年刊)で描かれた魂は、魂の喪失に伴って元の性格が失われていることから、靈魂という意味ではなく、性格を伴った心理という意味合いで用いられるようになる。この魂を擬人化したものが善玉悪玉となり、『心学早染草』の特徴である心理的性格を描く基盤が成立する。多くの図版が掲げられ、そのいちいちについて論評を加えながら、『心学早染草』の善玉悪玉のキャラクターの成立過程について、有益な結論を得ている。

第3節「善玉悪玉の影響」では、『心学早染草』の善玉悪玉に影響を受けて描かれた作品を収集し、時期やジャンルごとにその特徴を考察する。「(一) 寛政から文化・文政まで」において、浮世絵では、善玉悪玉によって遊女や客の心情を巧みに表現している。草双紙では、『心学早染草』刊行以後、作者京伝をはじめ、京伝以外の作者もこのキャラクターを利用し、自らの作品に取り入れた。そこでは善玉悪玉だけでなく、例えば顔に「心」と入れたキャラクターを出すことで、善悪に限らず登場人物の心情を吐露させている。また、さまざまな文字を入れることで、抽象的な事物を擬人化する際の有効な手段となった。しかし合巻の時代に入るとあまり用いられなくなる。一方、扇子を持って踊る悪玉の様子は、歌舞伎の舞踊に取り入れられた。「(二) 天保から幕末まで」において、天保13年に出された出版統制令は、錦絵に歌舞伎役者や遊女などを描くことを禁じ、合巻は歌舞伎の趣向や似顔を禁じ、忠孝貞節や児女勧善を主旨とする内容で出すようにというものであったため、題材を教訓的なものに変更せざるを得なくなり、善玉悪玉が再び用いられるようになった。幕末になると世情が不安定になり、麻疹の流行期に出されたはしか絵や、社会混乱を描いた風刺画に善玉悪玉が見られる。「(三) 明治」において、浮世絵では、善玉悪玉を配して同じ職業や身分の者を善悪で描き分ける作品が多く出された。子ども向けの双六では、小学校入学から始まって文明開化の官吏出世の道を巡る作品などに見られる。また、かるた絵などでは、善悪の行動を示すために善玉悪玉が描かれた。これらの作品からは、明治政府の教育方針が表れており、近世に比べてより積極的な教導のために用いられている。明治期の特徴は、着衣の姿が多いことである。これは西洋の思想が入ったことで、裸での外出が取り締まられるなどの社会通念の変化による。当時話題となった社会的事件や心中事

件を取り上げた本や新聞錦絵は、善玉悪玉を描くことで事件の善悪をより際出たせている。以上のような善玉悪玉の享受例の探索も、非常に手間のかかる作業が行われており、資料として大変貴重である。

第4節「寛政二年という年」では、『心学早染草』が出された寛政2年に焦点を当て、この年に起きた出来事を概観する。松平定信による寛政の改革が本格化し、人足寄場が設置され、旧里帰農令が発せられた。物価引下令や奢侈品の儉約が勧められた。吉宗によって進められた白砂糖や朝鮮人参に関する政策が実を結び始めた。文学では、それまでの天明文化を支えていた武家作家が去り、作品の質も徐々に教訓的なものへと変わっていく。『心学早染草』が刊行された年を横に見て、現象を幅広く捉えており、論文全体の考察に厚みを加えていると言える。

第2章「竜宮の描写をめぐる」では、まず第1節「竜宮城はどこにあるか」において、さまざまな竜宮訪問譚から、竜宮城の場所、もしくはその入り口となる場所がどこにあるかを見ていくことで、竜宮の持つイメージを検討する。中国では仙郷と融合して考えられ、洞庭湖や太湖などの湖が竜宮へ通じていると考えられた。日本では、中世までの竜宮は主に畿内を中心とした場所にあると考えられていた。しかし近世に入ると、東は隅田川、箱根、天竜川、諏訪湖から、西は長門峡、琉球へと、全国各地に広がったことがわかる。本節では、近世以前と近世では想定される場所に違いがあると指摘したことで、日本文化における地理的な意識を鮮やかに描き出すことに成功している。

第2節「黄表紙が描いた竜宮」では、黄表紙でも先行する物語や伝承を引き継ぎ、琵琶湖、志度の浦、壇の浦、大物の浦のように地名が特定されている例が見られることをまず明らかにした。その一方で、具体的な地名を設定せず、竜宮を大海や海底にある想像の世界として描いた作品も多い。これはさまざまな昔話や伝説を綯い交ぜにした結果、特定の地名を設定することが困難となり、想像上の架空の地として描いているためである。さらに、中洲新地や江戸の掘り抜き井戸などの当時話題となっていた場所も、竜宮へ繋がる場所として作品に取り込んでいるとする。第1節の成果を応用して、当時の戯作者たちの発想の豊かさをよく描き出している。

第3章「京伝周辺の人物」第1節「京伝の後援者たち」では、京伝の後援者となっていた三人の大名の子息たち、松江藩主松平治郷（不昧）の弟である松平衍親（俳名雪川）、姫路藩主酒井忠以の弟忠因（酒井抱一）、松前藩主松前道広の弟百助について考証した。また、第2節「山東鶏告と唐洲」では、門人山東鶏告と唐洲を取り上げる。この二人はかつて京伝が作った人で京伝自身が用いた名前だと考えられていたが、実在の門人であり、その活

動も跡付けられる。本章では、これまで論じてきた作品表現のみならず、それが生み出された場にも焦点を当てていて、論文全体に広がりを与えている。

なお、京伝の作家としての特質についてももう少し言及があるとよかったという点も指摘された。その点、今後の検討課題だが、本論文の完成度を損なうものではない。

全体に資料を博搜し、丁寧に検討を加えた上で、妥当な結論を導き出している点が評価に値する。特に多くの画像を渉猟した点で、旧来の戯作研究を一步進めたことがすぐれていよう。本論文で示された新たな知見と研究成果は、近世文学研究に資するものであることは明らかであり、本論文の意義はきわめて大きい。以上により、論文審査担当者3名は全員一致で、関原彩氏の学位請求論文が博士（日本語日本文学）にふさわしいものであると判断した。

論文審査主査	鈴木健一	教授
	神田龍身	教授
	菊池庸介	特別非常勤講師 (福岡教育大学教授)